

三角洲上の地理 (下)

小 牧 實 繁

日野川は野洲川の如き暴河でないのと堤防がよく保護せられて居るので決潰する事は略んご無い。其の堤防の能く保護せられて居る情態は至る所に見られるのであるが其の一部分を示すならば第三圖の如くである。之れは野田と北里村字野村小字野ヶ崎との間の日野川左岸の堤防を下流に向つて望んだ所であるが、堤防上の道路の左は松林を以て固定せられ右側も一部分は松林を以て、其れより河身に近い部分は藪林を以て保護せられて居る。此の松林は元來堤防保護の目的を以て植林せられたものであるが、副的には堤防上道路の松並木となつて大いに風致を添へて居る。太古人口未だ稀薄であつた頃は日野川も大いに荒れた事であらうに今や平穩なる良河となつた事を思ふと、次第に人類が自

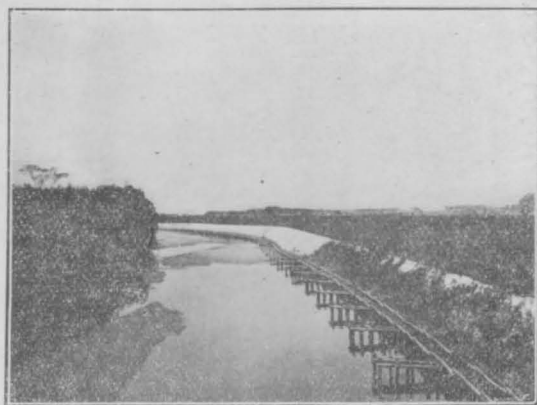
第三圖 日野川左岸堤防



然に適應し自然を制御して行く過程に就いて考へざるを得ないのである。此の松並木は舊藩時代も比較的

新しい時代のものである事が其の樹齡から察せられるが、最近のものでは勿論ない。然るに人間の努力は該松並木の植樹以來最近ま

第 四 圖 日 野 川 下 流



で續いて居る事が第四圖によつて知れる。圖は野村橋より日野川下流を望んだ所であるが、之れを一見すれば第一に石垣及びコンクリートを

以て頑丈に右岸の堤防脚部を固めたる上尙之れに沿ふ二重の密なる杭柵と之れより直角に突出する二重の疏なる杭柵とにより水勢の激突を防ぐ新

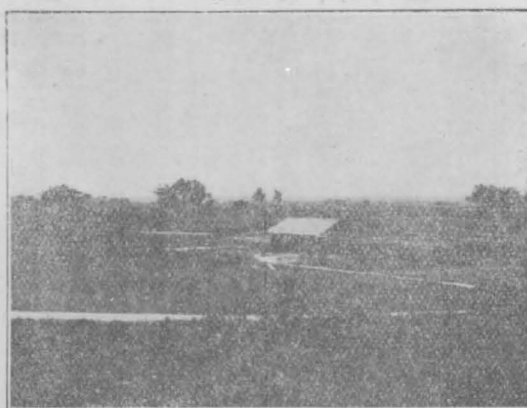
らしい工事の施されて居るのを知るであらう。之れを以てしても天然の威力が如何に絶大のものであり人間の努力が又如何に執拗なるものであるかが解かるのであつて此處に地理學徒の所

謂地人相關の原理が實物を以て表現せられて居るのである。

野ヶ崎南方の地には明治二十五年測圖大正九年修正測圖の陸地測量部五萬分一地形圖には水田の符號も畑の符號も附せられて居ないが今は此處に水田と畠とが開かれ畠には桑と麥とが作られて居る。但し其の間には多少葎を生じた荒地が残存して居て其の開墾が比較的最近の物であり又隅々までは及んで居ない事を物語つて居る。然し兎も角三角洲上の荒地が次第に開墾せられつつある事は如實に看取せられ此の點に三角洲上の地理的特徴が現はれて居るのである。

更に興味を以て見るべきものは次の第五圖である。之れは荒蕪地開墾のため根據地とせらるる一軒家であつて、附近には未だ多くの葎生が残つて居て其の地が最近まで一帯に荒蕪地であつた事を示して居るのであるが一部分は開墾せられて其處に麥と桑とが耕作せられて居り、野村に至る道路及び日野川左岸堤防上の道路に續く一條の小路が一軒家より開墾地及び荒蕪地の

間を通じて居る。此の一軒家は正確に云へば日野川左岸堤防上の道路と之れより野村橋を渡つて野村に至る道路との分岐點より西小許の地點に位置する



のであるが其の主は野村より川向ふの此の地（里人野ヶ崎の事を川向ふ又は川向ひと稱す）へ出村した出子（里人移出民を

のであると云ふが徳川時代甚だ盛であつた出村を今茲に現實に見るのは極めて興味深き事實であつて茲に三角洲上の濃厚なる特色が現はれて居るのである。

野ヶ崎は野村よりは日野川を隔てた對岸の地であるが野村の地内である。此の場合には日野川河道の東遷により舊野村地内が川を以て東西に分割せられたものと考へられない事もないが實際には其の史實は明かでないから、矢張野ヶ崎は野村の出子が川を越えて移住し開墾した所で其の故を以て親村たる野村の地内となつて居り、而して野村出子の開墾は現在尙繼續して居て如上の一軒家も存在する譯であらう。然れば此の一軒家の物語りは全野ヶ崎の歴史を知る上に大切な手掛かりとなる事疑ひない。

實際に於いて野ヶ崎は野村の出村である。字

（）であつて今は専ら此の地に住し以前は野村の大工職であつたから今も仕事のある時は大工をなし大工の暇な時は此處川向ふに於いて田を開き稻を作るのである。此の出子は極く最近のもの

佐波江の鈴木善兵衛氏より聞ける所によれば、野ヶ崎は二十軒の中一軒は兵主村堤より、一軒は同五條より、二軒は北里村江頭より、一軒は中里村比留田より、一軒は同村比江より、一軒

第五圖 荒蕪地の開墾

第六圖 野ヶ崎に於ける日野川左岸



つた事は今も野ヶ崎の生業が全部農業であつて唯副業的に漁をなすものが一二人存するに過ぎないとの事實が之れを實證して居る。

野ヶ崎邊

でも日野川堤防の保護はよく行届いて居る。第六圖は其の左岸の一部分を示すものであるが此の邊は大部分藪を以て固められ又藪の中に櫟ど

ん栗の木等が植ゐられて居る。而して道路は矢張堤防上を通じて居るのであるが、此の堅固なる堤防の下には直ぐ野ヶ崎の稻田が開けて居る。堤防は下流湖岸に近づくに従ひ次第に高度を減する。之れは水理上から河口附近に於いては然かく堤防の高きを要しないからである。人間は如才なく自然の理法に適應し決して無駄な努力は致して居ないのを知る事が出来る。

野ヶ崎聚落の北部に於いては家屋は凡て堤防上の道路に沿ひ堤防と田圃との邊縁に家居し申合せた様に南東を向いて左側道路に臨んで居る。此の家の建て方は此の所としては最も適當なものである。第一に他と交通する場合此の堤防上の道路に沿つて居るのが先づ最も便利であり又堤防と田圃との邊縁に家居すれば矢鱈に田圃面をつぶす必要もなくて済むからである。斯くて此處には堤防に沿ふ細長い聚落が發達したのである。

細長い野ヶ崎の聚落を堤防に沿つて下流に下ると其處に佐波江の聚落が發達して居る。佐波

江は日野川右岸の地が本部であるが、其の西部の一部分は川を越して左岸にまで食み出して居る。而して聚落の形式より云へば此の部分は寧ろ野ヶ崎北部の延長であつて、其の間の區劃は單なる行政的區劃に過ぎない。單に聚落の外觀のみを見て行くならば其の間の區劃は全く氣着かすに行き過ぐるであらう。

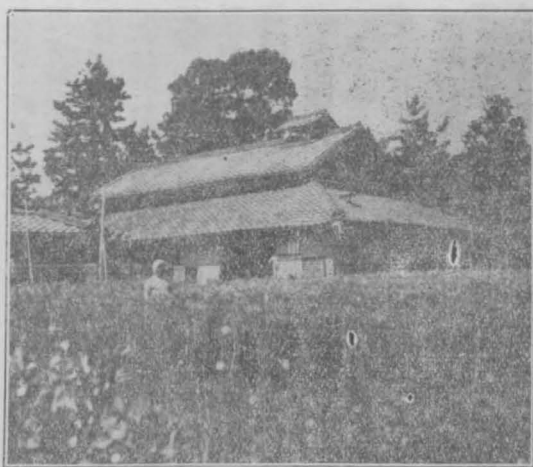
第七圖

佐波江の橋より見たる日野川左岸



佐波江聚落の本部は第七圖に見る日野川河口の葭生の西端とし圖中の農家を最も西の家

第八圖 嘉永以前の前家の



として殆んど同様の農家が同方向の南を向き東西の方に向に棟を並べた氣持のよい聚落で

ある。唯一軒第八圖の稻村龜吉氏宅（嘉永以前）の建築にかかり當時のままであると云ふ）が例を破つて西向きであるのみである。

家屋の南方前面には畑があり畑を隔てて東西に通する道路があり、道路に沿つては日野川と日野川新川とを連ねる通船路がある。此の道路と通船路とは第九圖（東を望む）に見る如くであ

るが、佐波江の聚落は北は琵琶湖南は通船路東西は兩日野川の水面に取圍まれた一種の輪中に立つて居ると云へる。

第九圖 佐波江の通船路



輪中の中

には家屋と畑と林とがある譯であるが、林は大體湖に面した北側にあつて冬の風を遮ぎり其の南に家屋があり家屋の南に畑があり、畑を劃し輪中の南一面には田圃が続いて居る。家は南向きに東西に併列して居るのであるが、其の中央部に氏神社稻荷神社と外に天満宮が

鎮座しましたし聚落は全體として甚だ平和な天地である。

佐波江は三角洲上而かも其の尖端部の平地の聚落である事實より推測せらるる如く全く近世の新村である、近世も極く新らしい時代の新開である。

野田の里人より聞ける所によれば佐波江は其の土地一切が野洲郡北里村字江頭の人井狩一郎氏の所有であり住民は元來所々方々より寄り集まり一村をなせるもので原の村名を以て呼ぶ方が却て姓名を以て呼ぶよりも判り易いと云ふ事である。

尙之れを佐波江の鈴木善兵衛氏に就いて質すに、佐波江は戸數三十四で内一軒が僧侶である外は全部農業を營んで居るが、此等は何れも他より移住せるものである。其の主なるものは加賀美濃の兩國及び近江各地のものである。加賀よりは初め善兵衛、吉右衛門の二軒が移住し來り今は鈴木姓を名乗り六軒になつて居る。此の移住は先代鈴木善兵衛氏が今生存すれば百十七

八歳で其れが十三歳の時であつたと云ふから今より約百四五年前の事である。當時は美濃より移住したのも多かつたが今では近藤虎藏氏が一軒残つて居るのみで他は皆大阪へ移住して仕舞つた。其の後加賀からは又大谷氏が一軒移住

し來り今三軒となつて居る。其の他は凡て近江の各地から來たものである。郡内中洲村幸津川より樋上氏一軒來り今二軒となつて居り、同祇王村永原小屋町より鍬内氏一軒來り之れは今も一軒、蒲生郡岡山村牧より西仁左衛門氏一軒來り之れも今一軒、(但し牧よりの移住民は一時四軒になつた事があるが他は何れも京阪地方へ再移住したのである)栗太郡常盤村字志那中村より稻田氏一軒移住し今三軒となり、郡内中里村八夫より稻村氏來り今六軒となり、祇王村五之里より岩井氏一軒移住し之れは今も一軒、中里村小比江より小川氏一軒來り之れも今一軒、野洲町竹生より岡野氏一軒來り今二軒となり、中洲村立田より奥野氏一軒來り之れは今も一軒、篠原村より中村氏一軒來り之れも今一軒、蒲生

郡岡山村大房より橋本氏一軒來り今三軒となり野村より四谷氏一軒來り之れは今も一軒、都合三十三戸となり、僧侶相馬氏は大分縣大分郡より來たと云ふ事である。

此の中、野村の四谷氏が來たのが最も新らしく其れは今より十五年以前の事であると云ふから佐波江の聚落は今より百四十五年以前より最近十五年以前に至るまでに次第に他よりの移住者が増加すると共に聚落内で分家が出來其の一部は京阪地方等へ再移住するものもあつたが大體に於いては次第に戸數増加し以て今日の情態に發達し來つたものと云へる。

開墾の歴史に就いては尙文書を見た上確かな事を云ふ事にして今日は唯里人より聞き得たる口碑を記載するに止める。里人の語り傳ふる所と雖も最近百年内外の事件に關するのであるから然かく見當違ひも無い筈である。氏神稻荷神社は天保元年鎮座、(明治十年一月再建)と云ふ事になつて居るが此の時代の事ならば當代鈴木善兵衛氏(もう六十才以上であらうか)の祖父に

當る人なら實見した筈であるから稻荷神社が天保元年鎮座と云ふのは事實であるべく氏神の創建が左程新しいものならば、開墾の歴史も然かく古いものではなく従つて口碑傳説も比較的史實を物語つて居るものと見なければならぬ。兎も角佐波江は日野川三角洲の發達に伴ひ其の川崎三角洲の尖端部に生じた葭生を開墾する農民によつて形成せられたものである。然れば其の生業は一戸(僧侶)を除けば全部農業である其の生業が全部農に集中せられて居る傍證は此處佐波江は湖邊に近く漁の利も全然無い事は無いのに漁業に従事するものが一軒も存しない事實に見る事が出来る。漁業に従事するものが一軒もないのは一見不思議の様であるが、元來此の聚落が土地開墾のため發達したものなる事を考ふれば別段何の不思議もないのである。

聚落民は全部農業に勵むから又商家と云ふものがない。日用品等の商品は凡て江頭方面より入るのである。然れば此の聚落は農村としては純粹の標式的のものと云へる。

佐波江は斯くの如く純農村で一戸平均の耕作反別は比較的多く一町未滿しか耕作しないものは三十三戸中僅かに三戸のみで平均一町五反歩を耕作し、多きものは二町歩を耕作して居るが其の耕作は未だ集約的と稱する事は出来ず多くは一毛作で麥は畠に稻は水田に耕作すると云ふ風である。之れ一に土地に餘裕があるからである。

斯くの如く土地に餘裕があると云ふのは一に交通の不便(他の聚落と交通するには可なり遠い野道を歩まなければならぬ)を忍び、故郷を出でたる孤獨の淋しさを抑へ勞力を惜まず少數の人力を以て廣漠たる未開の三角洲を開墾したのによるのである。

此の三角洲は日野川河口に沈積した砂よりなつて居るので田圃の下底も従つて砂質の土壤よりなり餘り豊饒と云ふ事は出来ない。然しながら之れは次第に有機物質の混入と共に追々良質の土壤に向ふ筈であるし、一方地盤が砂地であると云ふ事は飲料水の點より甚だ良好なる條件

である。即ち此の地の井戸は十五尺乃至十六尺にして湧水するのであるが水は此の砂地を濾過せられて出るのであるから沼澤地の地下水とは異なり鐵分を含まず可なりの良水である。因みに此の砂層は厚さ二十尺に達すると云ふ。

同じ三角洲上の聚落でも川筋又は川口に近き所と川筋を隔れる沼澤性の所とにては飲料水に於いて大なる差異のある事は又此所佐波江と五條野田等とを比較すれば明かであらう。

扱佐波江の地は日野川河口に發達せる三角洲上の荒蕪地が舊藩時代新田開發の傾向を受けて其の末期開墾に着手せられた地で、開墾の餘勢は尙最近まで繼續して來たのであるが、其の三角洲は一體何の位の速度で發達して來たものであらうか。之れを正確に知るべき手掛かりはない。然しながら其れが次第に發達し來つた事を示す石碑はある。即ち日野川本川と新川との分岐點に明治廿九年まで大なる松の樹があり其れは同年大洪水で倒れたが、之れは約三百年以前の湖岸に植わられたものであると云ふのである。

之れは其の儘には信ずる事が出来ないかも知れないが、三角洲の發達の事實と關連する面白い傳説として保存の價値は充分ある。他日何等かの參考にはなる。況んや之れは昔より然かく云ひ傳ふる所で近時捏造の傳説ではないに於いてをや。而して最近に於いても三角洲が次第に發達するが如きは鈴木善兵衛氏の實見した所である。但し三角洲は理論上からも考らへれる如く唯先きへ先きへと發達するものではなく、鈴木氏は時々之れが浪にて崩れる事があると云つて居る事からも明かなる如く、大體前方に發達せんとする三角洲の尖端は波浪の激衝する時崩れて其の兩側に運搬せられ沈積して三角洲の幅をも廣めるのである。

實際其れは現實に實物によつて證明せられて居る。即ち新川は大正八年改修せられて今の所に排出せられたのであるが、其の川崎に既に美しき標式的の砂洲が發達して居るのである。之れは三角洲が先きへ先きへと發達するならば形成せられる筈がないのである。又後に記す如く

日野川河口より右岸の湖岸に砂丘が發達して居るが之れも三角洲が前方にのみ發達するならば此所には其の發達を見ない筈である。故に三角洲の發達と云ふのは横へも太りながら前方へ延びて行く事で、斯くありてこそ此處に新たな幅廣の荒蕪地も生じ之れが開墾せられて其處に新村も發達するのである。

新川右岸の荒蕪地を開墾したるものに新畑の聚落がある。之れは其の地名からしても先づ新らしき開墾地である事が知れるが實際此れは野村の^デ出子である。

鈴木善兵衛氏によれば新畑は初め野村よりの出子三四軒で開墾したもので今はその三四軒が分家して十一軒となり其の他に加賀より二軒蒲生郡桐原村池田より一軒同古川より一軒、郡内中里村比留田より二軒、同玉津村赤野井より一軒蒲生郡岡山村田中江より一軒移住し來り開墾に着手し此等十九軒は何れも農業に従事し比較的大なる面積を抱擁し一町歩以下を耕作するものは三四軒で他は何れも一町七八段歩を耕作し

て居るとの事である。其の開墾の歴史はよく佐波江に似て居る。新畑には以前美濃人が多く居たが今は一人も居なくなつたとの事であるが、此の點も又甚だよく佐波江開墾の歴史と類似して居るのである。

新畑の湖岸、即ち佐波江より日野川新川を越して蒲生郡岡山に至る湖岸には小規模ながら湖岸砂丘が發達して居る。余は今日まで海岸砂丘は比較的數多く踏査したが湖岸砂丘は未だ嘗て見た事がなかつた。其れを初めて此地に見たのである。ミシガン湖畔から記載せられた湖岸砂丘の如く然かく高大なるものではないけれども高さは余の實見した當時の湖面からは約二米もあつた。其の砂は石英及長石粒が卓越し汀線附近に於いては多量の砂鐵を混じて居り面白い程磁石に吸着くのを後に實驗したのである。砂丘表面には密でもなく粗でもなく可なり砂丘植物が生じて居り、其の主なるものは余の採集したものを理學部植物學教室三木學士の鑑定せられた所によれば次の如きものである。

Salix glandulosa, Akameyanagi

Salix thunbergiana, Nekoyanagi

Calystegia soldanella, Hamahirugao

Cyperus rotundus, L. Hamasuge

Galium verum, var. *lactuum*, Kawaramatsuba

Vitex trifoliolata, L. var. *Ovatamak*, Hamagō

Cynodon Dactylon, Gyōgishiba

Oenothera odorata, Matsuyoigusa

Lychnis miqueliana, Fushigurosenno

Lysimachia Fortunei Max., Numatoranoo

Imperata arundinacea, var. *Koenigii*, Chigaya

Artemisia capillaris, Kawarayomogi

Arabis Thaliana, L., Shiroinuunazuna

Cladrastis amurensis, Inuenju

Artemisia vulgaris, L. var. *indica*, Yomogi

Lespedeza sericea, Medohagi

野洲川北川の尖端附近に砂丘が發達して居るか否かは余は未踏査であるから今日何とも云へないが、野洲川南川の尖端部には何等砂丘らしきものの發達して居ない事から考へて野洲川北川尖端附近にも恐らく砂丘らしきものは發達して居ないものと考へられる。野洲川少なくとも南川の尖端部に砂丘が發達して居ないので日野川河口附近に其發達を見る理由は何であらうか此れは更に調査を進めなければ確かな事は言へないが恐らく日野川は野洲川よりも流勢が強くない其の河口附近に沈積する土砂の大いさは野洲川河口附近に沈積する土砂の大いさよりは稍小さく加之に野洲川河口に於ける琵琶湖の廣さより日野川河口に於ける琵琶湖の廣さが遙かに廣く従つて湖面の波浪も大きく風も強く當る譯であるから、野洲川河口附近に於いては砂が波に打上げられ風に吹上げられる事が出来なかつたのに反して日野川河口に於いては砂が波にも打上げられ風にも吹上げられて斯くは小規模な

がらも砂丘が發達したものではなからうか、記して後の研究を俟つ。

之れを人文地理上より見るに該湖岸砂丘は新畑聚落との距離も可なり遠く其の耕地や家居に飛砂を吹送る様な事もなく人間との交渉は極めて少なく第一之れを自然地理上より見て其の高度も面積も然かく大なるものではないから左程注意すべきものではないかも知れないが其れが湖岸の砂丘であつて我國に於いては可なり珍らしいものであると云ふ點に於いて人文地理上は兎も角自然地理上は稍注意すべきものであると信ずる。今後琵琶湖沿岸の他の地方に湖岸砂丘の有無を検し若し之れ有らば其れ等との比較を試みる事は又興味ある一研究事項たるを失はない。

此の砂丘ある湖岸の東方岡山村に近く野村の堰堤がある。之れは日野川三角洲上及び附近の灌漑溝水位を常水位に保つため築造せられたものであつて此れにも湖岸三角洲上の一特徴が現はれて居る。即ち此の附近は低平なる三角洲上

に位置する湖水より溝渠を以て灌漑水を引く事が出来るのであるけれども、其の湖水面は決して常水位に保たれる譯のものでなく雨天又は乾天により多少は高低あり灌漑に不便であるから溝渠の幹線と湖水との接觸點に閘門を作つ水を調節して居るのである。

蒲生郡岡山村牧の聚落は北面に松林を植え之れを北方より見れば松林に隠れて家居は姿を見せないのである。此れは冬期北方湖水よりの風が甚だ強い事を示して居り、又人間が如何に自然的條件に適應し、能ふる限り其の生活を安穩平和にせんと努力して居るかを例示するものである。牧聚落民は斯かる努力を以て極めて古くより此處に安住して居たものと考へられる。其の古くより此處に居住して居た事は其の氏神五社大明神境内の大杉が恐らく千年を経て居るであらうと思はれる古木であるによつても知れる山地に行けば此れ位の古木も數多あらう。斯かる古木が此所牧の湖邊に矗立して居るのは寧ろ不思議に思へる位で此は恐らく五社大明神の境

内に植樹せられたものがかく成長したものと思はれ牧の聚落が甚だ古い事を想像せしむるに充分である。

然れば湖岸の聚落は一概に新らしいと云ふ事は出来ぬ。三角洲尖端部の聚落は大體新らしいと云へるが尖端部より離れた湖岸の聚落には甚だ新らしくないものも多いと考ふべきものの様である。野洲川南川河口に近い今濱新田北川三角洲尖端部の菖蒲喜合兩新田日野河三角洲尖端部の野々崎佐波江新畑等の聚落は皆新らしいものであるが、三角洲尖端部より離れた湖岸の聚落中には五條牧等の如く可なり古相な聚落も存するのである。聚落の發達は大體に於いて三角洲及び湖岸線の發達と一致して居るものと思はれるが、湖岸の聚落とても普通一般に考へられて居る如く一樣に新らしいのではなく場合によりては可なり古いものである事を注意しなければならぬ。

牧より同村大房に至る間には田圃面より一段高く豆、麥、桑、種油、桐、隠元豆等の植わられ

た畠地が存する。之れは更に南方まで續くが此の田圃中の小高い畑の成因は一寸不可解のものである。然しながら此れは舊日野川なるものを想像し其れと關連せしめて考へるならば比較的容易に解釋出来ると思ふ。此れは恐らく舊日野川の河床若しくは堤防に當るものであらう。附近に存する古川の地名等をも考察中に入れ、詳細なる土地高低の分布、土壤の土質的分布を調査すれば恐らく興味ある結果を得るであらう。然しながら余は今日未だ其の研究を進めて居らぬから今は唯豫察をなし得るのみで何とも確言は出来ないのを憾む。

大房附近は如何にも水郷の氣分豊かな所で灌漑又は通運用の溝渠に泛ぶ小舟が數多く認められる。之れによつても前記野田に見る農村生活の様式が單に野田特有のものではなく三角洲上廣義の低平地の農村に共通のもので、三角洲でも湖岸に近い所全體の一特徴である事を知るのである。

以上に余は本年一月以降約半ヶ年に亘り野洲

川及日野川三角洲上を踏査した際特に興味を以つて注意した若干の事實を列記し尙之に多少の私見を加へたのである。然しながら其の踏査たるや初めより餘暇を盗んでの副業的事業であつたので未だ決して充分の結果を得て居ない。今後尙踏査を續けるならば尙多くの興味ある新事實や前記の私見に補訂を餘義なくする事實が発見せられるに違ひない。余は其れを希望して止

まないものであるが一先づ備忘録整理のため又今後踏査の際に於ける参考のため茲に既踏査中見聞せる事實及び之れに對する私見を述べて見たのである。比較的誤謬少なく統一ある結論に至つては之れを後日に待たなければならぬ。(完)

(一九二六・九・一二)

若狹蘇洞門の奇勝と有用鑛物

石 川 成 章

海岸の斷崖に於て、岩石の節理の爲めに生じた奇勝に就ては、本邦太平洋岸よりも日本海岸に多くの期待を持つのは當然であつて就中著名なのは越前の東尋坊、筑前の芥屋大門ヤオホト、肥前七ツ釜等で、東尋坊は花崗岩、芥屋大門も七ツ釜も玄武岩の節理が呈する奇勝で、本誌にも既に記載せられた事があり、世人周知の筈であるが

若狹蘇洞門ソトモの奇勝は、從來交通の不便であつた上に一年の大部分風浪が荒くして、之を觀賞する事の六ヶ敷爲めか餘り廣く知られて居無い様であるから、茲に之を江湖に紹介し様と思ふ。本年八月大阪毎日新聞は、數枚の寫眞を掲げて、蘇洞門の奇勝を宣傳したから、之を覽た讀者は、尙記憶に新たなるものがある筈である。